

ジャングルで遭遇した 父の飯盒

所 功

モラロジー研究所教授

まさに運命の出会い。しかもその日は父の命日！

私は父を知らない。父「所久雄」は、私の生後まもなく召集を受けて出征しゅつせいし、その一年後に戦死を遂げた。

一 兵卒の覚悟

我が家は岐阜の小作農家であった。両親が結婚した前後に祖父母が亡くなり、一町（約一ヘクタール）に近い田畑を耕していたのだ。

昭和十七年（一九四二）の七月、前

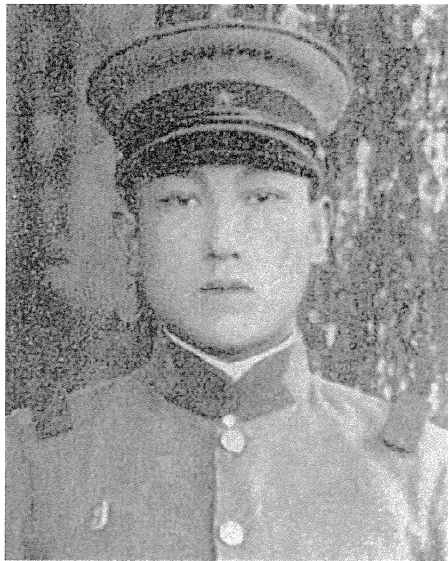
隣に住む父の同級生が、威儀を正して玄関に立ち、「オイ久雄、貴様の番だ」と言つて、一片の紙を手渡した。赤紙の召集令状である。

時に二十九歳の父は、「そうか、とうとう俺もお召しに預かったのか」と言いながら、何遍も令状を読み返し、そして私の母（かなを）に言った。「驚くなよ。畏れ多くも天皇陛下は、俺みたいなものを朕ちんの股肱ここうと仰せら

れるぞ。有難いことだ。これで俺も一人前の働きがさせてもらえる。後をしつかり頼む」と。ただ、いつになく声が少し震えていたという。

大正十年代に尋常小学校で学んだ父にとっては、一介の農夫にすぎない自分でも、お国のために働く機会を与えられたことが、確かに「有難いこと」だったのであろう。

もちろん、田畑のことや家族のこととは、大いに気懸かりだったに違いない。それでも、国民の親と仰がれる天皇陛下が、敢あえて自分のような



出征当日に撮った父(29歳)の記念写真

者を召し出されたのだと思うと、「一人前の仕事ができる」ことに誇りのようなものを感じたのかもしれない。

それから父は、岐阜の原隊で訓練を受け、五カ月後に広島へと移った。その広島から届いた唯一の手紙には、こう書かれている——「小生、死ぬも生きるも皆運命と思ひ居り、日夜何時もかも、神仏の御加護あるを喜び、軍務に精励して居る。くれぐれも云ふが、体を大切にせよ」。

これは南洋へ向かう前に母へ宛てた遺書といえよう。一方で母や私

のことを気に懸けながら、他方で死を覚悟している。

岐阜の原隊に入った頃は、母が面会に行くと、「俺は必ず生きて還るかな。たとえ片手片足になっても戻ってくる」と口癖のように言っていた。

しかし、この手紙を書く段階では、もはや死ぬことも運命として覚悟を決め、生死に固執することがなくなりつつあったように思われる。

父が乗った船は、激戦地へ突っ込むような形で、昭和十八年一月、辛くもラバウルへ到着した。しかし落ち着く暇なく、ソロモン群島のコロンバンガラ島を経てニュージョージア島に上陸し、ムンダ飛行場の建設と守備に従事している。

そんな激戦の地から、父は一枚の絵葉書を送ってきた。

「前略 その後、功やかなをは達者か。小生、神仏の御加護を喜び、

熱い南海の地で日夜元気にご奉公致し居るから安心しろ。

軍務多忙につき、便り仲々出来ぬが、心配するな。春先にて空気乾燥するにつき、火の元に注意せよ。役場・村方・親戚の皆々様に、よろしく申してくれ。時節柄、体を大切にし、どうか立派に功を育ててくれ。」

この葉書は「軍事郵便」「検閲済」であるが、父の心は充分言い尽されている。ここには祈りこそあれ、未練がましい不安も苦悶も感じさせない。戦友が次々と戦死する中、「日夜元気に御奉公できる」ことは、「神仏の御加護」のお蔭であり、「喜び」だったに違いない。これが戦場における名も無き一兵卒の正直な心であろう。

戦死を知らせる夢

そして、まもなく父に運命の日が

訪れる。ニュージョージア島に進撃してきたハルゼー提督率いる米軍に、海と空から猛攻撃を受けて、ムンダの守備兵はほとんど全滅せしめられたのである。

母に父の死を知らせるザラ紙の公報が届けられたのは、その四カ月後である。そこには「陸軍兵長 所久雄

右ハ昭和十八年七月二十七日、ソロモン諸島ニュージョージア島ムンダノ戦闘ニ於イテ、腹部砲弾破片創ヲ受ケ、戦死セラレ候」と記される。

しかし、母にとつては、必ずしも突然の知らせではなかったという。父が亡くなった七月終わりの明け方、こんな夢を見た——軍装で階段を駆け下りてきた父が、母に「オイ元気にしとるか。功のこと頼むぞ。自分はこの通り丈夫だから心配するな」とだけ言つて、サツと消えた——

驚いて目を覚ますと、隣に寝てい

た一歳半の私が「お父ちゃんは？」と尋ねるので、二度驚いたそうである。

それだけではない。いつものように戸棚を開けたら、きちんと並べてあった夫婦茶碗の片方が割れていたり、家の前庭で青々と茂っていた柿の木が数日のうちに枯れたり、不思議な現象が続いたのだ。

この話を私は小学校へ入る前後から何度も聞かされた。ただ、父の姿も声も記憶にない私にとつては、他人事のようにしか思えなかった。

少し大きくなると、夢は思いつめていた母の幻想であり、他のことも単なる偶然が重なったにすぎないと冷めた受けとめ方しかできなかった。とはいへ、進学や就職など人生の節目を迎えると、父に相談できたら、と想ったことも少くない。とくに結婚後は、妻子を遺して逝った父への思いが一段と強くなった。

父の刻んだ遺書

そんな折、父の享年と同じ満三十歳を迎えた昭和四十七年（一九七二）の七月下旬、休暇を利用して、同じくソロモンで父を亡くした説田好重機君と二人で戦地を訪れた。

ムンダ飛行場に着くと、真つ黒な現地人数名とともに、屈強の日本人が出迎えてくれた。私より四つ年上の佐藤行雄氏である。

その佐藤さんに先導されて、早速海岸を四キロほど進み、ジャングルの山道を登った。

すると、三十分ほどして、現地の青年が素足に触れたものを次々と拾い上げた。弾痕と腐食で穴ぼこの水筒や飯盒、真二つに割れた鉄兜、錆びついた三八式歩兵銃など、いずれも日本兵の所持品である。

それを受け取った佐藤さんは、飯

盒の内蓋を擦りながら、「これ、戸、いや所と読めませんか」と興奮気味に尋ねてきた。

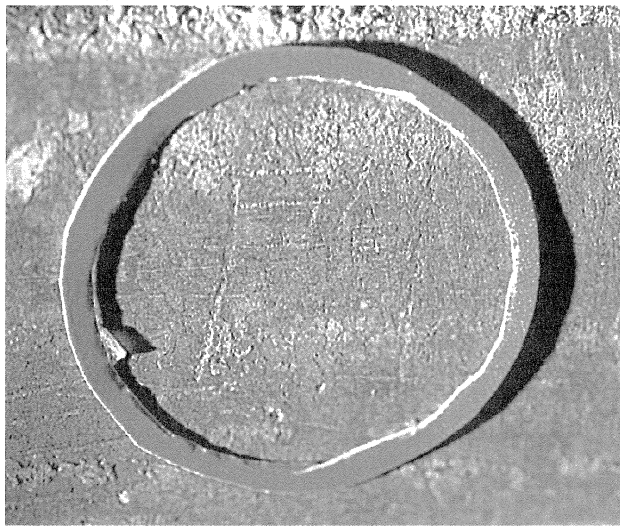
驚いて見ると、飯盒の内蓋に釘か何かで刻んだ「戸」と、その右側も、「斤」と読める。まさしく「所」だ!

父の所属した二二九連隊十二中隊の戦没者名簿で、所という姓の人は他にいないから、これは父の刻んだ文字に違いない。

そうであれば、この付近に散らかっているものは、すべて父の遺品であり、刻んだ文字は父の「遺書」に等しい。それを手にした途端、もはや涙を抑えきれなかった。

翌朝早く現場へ行くと、すでに各家からツルハシやスコップを用意してきた現地の人々が、あたりの雑草を刈り砂利を取り除いた。

すると、黒い塊が出てきた。よく見ると、人骨である。ほとんど土に



ジャングルで見つけた飯盒(右)と内蓋に刻まれた所(見やすく輪で囲む)
(靖國神社奉納。遊就館展示。所功『靖國の祈り遙かに』神社新報社より)

化す寸前の僅かに残ったボロボロの骨が、木の根に挟まっている。長いのは脚の骨、丸いのは大腿骨だろうか。いずれも父の遺骨に違いない。

その際、ふと時計を見てドキッとした。七月二十七日、なんと父の命日である。足かけ三十年前の今朝、父はここで米軍の砲弾を受け最期を遂げたという。それから三十年経つて、父の遺骨を息子の私が祥月命日に拾い上げたのである。

これは単なる偶然だろうか。そうかもしれない。ただ、私にとっては、目に見えない父の靈魂が存在して、ここに一人息子の私を呼び寄せたとしか考えられない。

ところ いさお

昭和十六年(一九四一)、岐阜県生まれ。名古屋大学卒業、法学博士(慶應義塾大学)。専門は日本法制文化史。現在、京都産業大学名誉教授・モラロジー研究所教授など。著書、『伊勢神宮と日本文化』『皇室典範と女性宮家』『松陰から妹達への遺訓』(勉誠出版)。